

内容分析を用いた新聞記事における学術雑誌の扱われ方の調査

松本 和佳奈

今日の日本では、科学技術の進歩が社会にどのような影響を与えるか、一般市民における関心の高まりが見られる。また、学術的な内容を公衆に伝える方法として新聞等のマス・メディアが重要な役割を果たしている一方で、インターネットの普及や科学技術コミュニケーションの推進に伴い、非専門家も様々な専門的な科学技術情報にアクセスできるように変化している。そこで本研究では、科学技術研究分野を取り巻く環境が大きく変化する中、また、非専門家による学術論文へのアクセスを容易にした PLOS ONE 誌の創刊からオープンアクセスジャーナルが科学技術分野で浸透していく過程で、新聞による学術雑誌の扱い方、特に情報源としての学術雑誌の扱われ方において変化がみられるのかを比較した。

調査対象は、1998年1月1日~2021年12月31日の期間に、朝日新聞の朝刊および夕刊に掲載された本紙かつ東京発行の記事のうち、見出しもしくは本文に「学術雑誌」「学術誌」「科学誌」という語のいずれかが含まれている記事から抽出した 1050 件である。そして対象の記事を、PLOS ONE によるオープンアクセスジャーナル創刊年である 2006 年および PLOS ONE の掲載論文数が減少に転じた 2013 年を基準に、掲載時期によって①1998年~2005年（PLOS ONE 創刊前）②2006年~2013年（PLOS ONE 創刊後浸透期）、③2014年~2021年（メガオープンアクセスジャーナル興隆期）の3期間に分けて分析した。記事ごとに、①記事の文脈に基づいた学術雑誌記載の目的、②雑誌の研究分野、③紙面、④学術雑誌名、⑤具体的な雑誌名が記載されていた場合にオープンアクセスであるか否か、データを収集した。

記事の文脈に基づいた学術雑誌記載の目的による分類から、2014年~2021年は他の期間と比べて情報源として記載されていることが減っていた。研究分野では、各期間を通して「生物学」、「医学・薬学」の順で多かった。また、掲載面に関する分析より「学術雑誌」という文言は総合的・社会的な内容の新聞記事の中で記載されることが増えていた。具体的な学術雑誌名は記載されている割合は減少していた。さらに、新聞記事にネイチャー誌およびサイエンス誌が顕著に掲載されながら、時期に分けて傾向をみるとこの2誌の割合は低下傾向にある一方で、次に続く引用雑誌は少数のものが多くなることが明らかになった。引用雑誌に占めるオープンアクセスを可能とする学術雑誌は大幅に増加傾向にあった。

本研究の結果から、新聞記事において学術雑誌がどのような文脈で記載されどのような扱われ方をされているかについて時期による変化や傾向を分析することにより、新聞記事によって公衆に発信される科学技術に関する情報に様々な変化があることが明らかになった。特に、オープンアクセス可能な学術雑誌の掲載が大幅に増加していること、情報源として用いられる場合に具体的な雑誌名を記載しない記事が増えていることが挙げられる。

(指導教員 松林麻実子)